

国文学研究資料館報

第29号
昭和62年 9月

ドイツにおける日本文学研究の動向

ローラント・シュナイダー

ドイツの日本学は、まだそんなに長い歴史を持つてはいない。江戸時代には、オランダに勤務していたドイツ人の二人の医者、E・ケンプファー(ケンペル)とP・F・フォン・ジーボルト(シーボルト)による業績がある。だがこの初期の日本研究を別にとすると、ドイツの大学で行われる日本学は、ハンブルク大学に最初の講座が開設された、一九一四年にやっと始まる。

この講座にはカール・フロレンツが招聘された。フロレンツは長年、東京帝国大学教授として教鞭をとり、上田万年のような者たちとともに共同研究を行い、討論を重ねた。フロレンツは、初めてドイツ語による、日本文学

史を書き、古代の日本歴史「日本紀」、神道の源流についての研究を行った。その研究はドイツの日本学の研究方針に決定的な影響を与えたのである。このように戦争前の日本学の重点は、大体において文学、歴史、宗教、言語に置かれていた。そしてそれ以後これ以外の分野、つまり芸術史、政治学、社会学もしくは民族学の様々新しい講座が徐々に開設されていくまでは、大戦後の最初の二十年は、従来のこれらの領域に専念したのである。

今日広範囲になった(西)ドイツの日本学研究の関心は、私の見るところでは、一九八七年七月十一日から十三日まで、ハンブルクで開催された第七回ドイツ・日本学

次	目
1	ドイツにおける日本文学研究の動向
2	ローラント・シュナイダー
3	データーベースサービスの開始
4	松本文庫について……重英未雄
5	新収資料紹介④河内三紅事集書画帖
6	共同研究報告
8	文献資料部事業報告……長谷川淳
9	文庫紹介④秋田図書館時雨庵文庫
10	研究情報部事業報告……柳町知彌
11	整理閲覧部事業報告……本田康雄
13	昭和六十二年度共同研究
13	第十一回国際日本文学研究集会
14	評議員・運営協議員・委員等名簿
16	兼報
17	利用者へのお知らせ
18	昭和六十二年度秋季学会開催一覽

会議に反映していると考えられる。三百人を越える出席者の中には、ドイツ語を話す国々(ドイツ、スイス、オーストリア)の日本学者、それに、そのほかのヨーロッパ諸国の学者がいた。更にこの日本学会議を組織した私にとっては、日本の二人の文学研究者、神田秀一教授と池田重教授の参加は、大きな喜びであった。池田教授はドイツ語で、宗砌、心敬、宗祇の連歌について報告して下さったのである。

ついでなのである。先述の池田教授の報告の外に、以下のものが報告された。「近世初期の小歌」「狂言のユーモア」「種彦——忘れられた作家か?」「詩における無常」「武田麟太郎の「雪の話」」「エズラ・パウンドの日本詩受容」「津島佑子」「小林秀雄」である。

いくつかの部門に分れて、全部で二十五の報告がなされた。それらのテーマは「徳川時代の国換え」「第二次世界大戦中の日本エネルギー政策」から「ドイツの報道機関に表れた日本のイメージ」を含み、「空海の言語哲学」にまで及んでいるのである。

二十五の報告の中で、全体の三分の一以上に当たる九編の報告が日本の古典文学と近代文学を取扱

観的なものに止まらざるを得ない。そこで私にとって興味があると思える、三、四点を簡単に思い付くまま、概略のみを列挙してみたい。

第一に、外面的な特徴として顕著なのは、今日よりも少ない大学でたいい同じ「古典的な」テーマ——例えば平安時代文学、徒然草、能、芭蕉、など——が取上げられていた以前の何年かと対照的に、最近では個々の大学相互間あるい

はそれぞれの日本学講座の担当者に、或るかなり大きな区分と、一種の研究の分担とでも言っているものが生れてきたのである。フランクフルト大学（E・マイ）では江戸時代の散文に、ケルン大学（G・S・ドンブラディ）では江戸時代前期の連歌・俳句に、ゲッティンゲン大学（C・フィツシャ）では江戸時代の演劇に重点がおかれている。ミュンヘン大学（W・ナウマン）では中世前期の説話文学が、ハンブルク大学（R・シユナイター）では中世後期の散文と叙情詩が主要なものになっている。最近新設された講座では、ハイデルベルク（W・シヤモニ）では大筋において明治文学について、トリア（I・ヒジャ||キルシユネライト）においてはもっぱら日本現代文学が研究されている。

第二に認められるのは、——多分、これは日本学の中の他の領域においても、同様で平行して観察される傾向であろうが——現代の日本が徐々に研究の対象に置かれるようになってきたことである。既に述べた文学研究者のほとんど誰もが、自分の主専攻を現代より以前の文学に持っているが、それと並んで、現代文学を第二の、つまり副専攻にしている。E・マイは、江戸時代の散文研究のかわら、現代の実験的叙情詩について、G・S・ドンブラディは、芭蕉や一茶に並んで現代俳句を、W・シヤモニは、鷗外や透谷研究とともに、いわゆる日本の原爆文学に、この小文の筆者は、室町時代の文学についての研究に従事しながら『平和歌集』『松川歌集』のような政治詩、もしくは現代日本の短歌クラブの考察に専念している。研究対象と共に、内容においても又、ここ何年かのうちに、ある種の変化が認められるのである。戦後のおよそ三十年代までは、主としていわゆる「古典名作」「高尚文学」が研究の中心を形づくっていたが、ここ何十年かの間に研究の関心は、むしろ現代より前の大衆通俗文学へ移っていったように見える。これは単に江戸時代の分野に当ってはまるだけではなく、ドイツの日本学者の視野に入ってきた、例えば説話、お伽草子または小歌などの中世文学や、説教節のような主題が調査されて、芸能の分野にも及んでいる。

最後に、若干簡単に方法論の分野にふれておくと、ここにも又ある種の新しい傾向が、際立って認められるのである。在来の一般的な文学研究方法ないし考究様式が、注釈者風・文献学的方法を中心にあった以前に比べると、文献学、文芸学、歴史社会学、もしくは比較文学などのように、比較対比や文芸社会学的な芽生えの強化が確認されるのである。この推移は既に研究テーマの選択に影響を及ぼしていたのであった。これはまたドイツの日本学研究に——その利益へ——ある種の萌芽へと向かわざるをえない。つまり日本学の内部では、日本文化や社会の研究に没頭する他の隣接領域へ、同時に日本学の外部でも他の学問領域へ赴くことを、余儀無くさせるのである。これは学際共同研究の新しい形式を作り出し、かつて久松潜一博士が提案された「文化学としての文芸学」の方向へ、小さい一歩を踏み出したことを意味することを示唆して拙文を閉じたい。

注 久松潜一「日本学研究について」
 J・クラインナー他「オーストリーにおける日本研究」ウイーン一九七六、二四七—二五八ページ
 日本文では国学院雑誌六七号（昭和四二年三月）一七—一七ページ
 （ハンブルク大学教授）
 昭和六十二年度外国人研究員）

データベース

サービスの開始

本年四月一日からかねて計画を進めてきたデータベースのオンラインサービスが開始された。

前28号で御紹介しているように今回サービスを開始したのは、

- ① マイクロ資料目録データベース
- ② 和古書目録データベース

の二つである。四月一日、まず館長が館長室の端末から、検索要求コマンドをキーインし、結果が表示され、終って料金表示が示されるといふ開始式により、無事サービスが開始された。

現在の利用状況は概略次のとおりである。

遠隔利用の申請件数は、七月末現在で三十五件あり、一七七回のアクセスが行なわれた。一回のアクセスに対する利用料金は、約七十円平均となっている。一方、来館利用は六回のアクセスが行なわれているが、検索結果をプリントアウトしていることから、一回のアクセスに対する利用料金は、約二三五円平均である。

松宇文庫について

雲 英 末 雄

昭和六十年、六十一年の両年度にわたって松宇文庫の資料調査および、マイクロフィルム化がどこ

昭和三十八年度
調査点数 一三三三三三三三
撮影点 数 一三三三三三三三

- 昭和三十八年度
- 市古夏生 東聖子 池田俊朗
- 宇城由文 加藤定彦 清登典
- 子 櫻井武次郎 田中善信
- 富田志津子 永井一彰 中野
- 沙忠 萩原恭男 藤田真一
- 森川昭 矢羽勝幸 島本昌一

昭和六十一年度
調査点数 一二九九点
撮影点 数 一二四三三三三三

- 昭和六十一年度
- 東聖子 池田俊朗 宇城由文
- 加藤定彦 清登典子 櫻井武
- 次郎 塩崎俊彦 谷地快一
- 永井一彰 中野沙忠 藤田真
- 一 森川昭 矢羽勝幸 渡辺
- 志津子 市古夏生 大石房子

調査は両年度とも七月中旬から開始され、六十年度は八月二十二日、六十一年度は九月三日で終了した。調査点数の総計は二六六一

調査は両年度とも七月中旬から開始され、六十年度は八月二十二日、六十一年度は九月三日で終了した。調査点数の総計は二六六一

調査は両年度とも七月中旬から開始され、六十年度は八月二十二日、六十一年度は九月三日で終了した。調査点数の総計は二六六一

調査は両年度とも七月中旬から開始され、六十年度は八月二十二日、六十一年度は九月三日で終了した。調査点数の総計は二六六一

られ、ついで四代目社長野間省一氏の逝去後講談社に寄贈され、その社屋の中に移されている。松宇文庫は近世初期から明治期に至るまで幅の広いコレクションだが、とりわけ元禄期より後の中興期から文化文政期の俳書に主力をおいたところに特色があり、研究のあまり進んでいない中興期の俳壇の様相を理解する上ではきわめて貴重なコレクションである。もちろんこれらのうち八十七点を翻刻紹介した中村俊定編『近世俳諧資料集成』全五巻（昭和51年6月、11月、講談社刊）も刊行されているが、まだ大部分は未翻刻・未紹介のもので、これから大いに利用価値のある文庫である。

昭和十二年と二十年と二度ほど火災にみまわれている。昭和十二年のときは芭蕉庵は全焼してしまったが、とう子夫人の機転によって、松宇文庫の俳書は一冊も焼失されることなく助かった。その後芭蕉庵は再建、同時に鉄筋コンクリート造りの書庫も作られた。昭和二十年の戦災ではまた芭蕉庵は焼失したが、書庫は鉄筋だったため、松宇文庫の俳書は焼けずに残った。

昭和十二年と二十年と二度ほど火災にみまわれている。昭和十二年のときは芭蕉庵は全焼してしまったが、とう子夫人の機転によって、松宇文庫の俳書は一冊も焼失されることなく助かった。その後芭蕉庵は再建、同時に鉄筋コンクリート造りの書庫も作られた。昭和二十年の戦災ではまた芭蕉庵は焼失したが、書庫は鉄筋だったため、松宇文庫の俳書は焼けずに残った。

昭和十二年と二十年と二度ほど火災にみまわれている。昭和十二年のときは芭蕉庵は全焼してしまったが、とう子夫人の機転によって、松宇文庫の俳書は一冊も焼失されることなく助かった。その後芭蕉庵は再建、同時に鉄筋コンクリート造りの書庫も作られた。昭和二十年の戦災ではまた芭蕉庵は焼失したが、書庫は鉄筋だったため、松宇文庫の俳書は焼けずに残った。

データベースのオンラインサービスが開始されたことにより、従来の準備室は、日常業務を行う各部担当者の集りである「データベースサービスマ」を、今後のデータベースサービスマをめぐる諸課題を検討する館内のデータベース委員会と別れることになった。何分新しい事業なのでまず着実に実施できることに限定してサービスを開始した。従って今後なお検討すべきこと、また利用者の御意見により改善すべきことも多いと思われる。またこのような当館の学術的情報サービスが円滑に発展するためには、原資料所蔵者などの御理解も不可欠である。関係の方々に御礼申し上げるとともに今後とも御協力を賜るようお願いする次第である。

なお、データベースサービスの具体的な利用方法については17頁の「利用者へのお知らせ」を、参照して頂きたい。

(データベースサービスマ)

しかし鉄筋の書庫ごと蒸し焼きにされたような状態のため、かろうじて本の体裁は保っているものの、損傷がひどく、本をひらくと崩れ

てしまうものもあり、とうてい閲覧に堪えるものではなかった。これらの俳書を一冊一冊ハトロン紙で包み、その上に書名を書き、整備をしながら目録を作成されたのが野間家の大内進氏（昭和48年没、享年八十六）と小池洋太郎氏であった。こうしてほぼ三千冊の俳書が救われ、しばらくの間は閲覧を希望する者には、それが許されていた。しかしいつまでも現状を維持するのはむづかしい状態で、早急に何らかの対策が考えられねばならない時期にきていた。

こうした折に松字文庫の調査・収集を、国文学研究資料館に強く勧められたのは成城大学の尾形功教授であった。文献資料部では講談社の編集総務局長の渋谷裕久氏や同編集部の中井晴二氏、あるいは野間家の小池洋太郎氏らと交渉を進め、やがて了解が得られたのだった。昭和六十年に調査が開始されるまでには、以上のような経緯があったのである。

ところで、この松字文庫の調査と撮影ははじめ講談社の社内で行なう手筈になっていた。それが直前になって資料館に借りてきて調査することが可能になった。かよ

うな方法での調査・収集は今までなかったことで、館側では搬入や消毒あるいは保管など、何かと配慮がなされた。損傷のはげしい本をいちいちやわらかい紙でくるんでダンボールにつめ、運送会社のトラックではこぶということは大変な骨折りであったが、資料館に搬入の上での調査は、調査員の人数制限などもあまり考える必要がなく、きわめて能率的に作業が行なわれたのは幸いなことであった。

調査員は首都圏在住の人々と、関西在住の人々、また長野県から一名の参加を得、さらに若干の補助員が付いた。一日数名で調査を進めたが、お互いに不明なところは相談したり、印文判読などは協力しながら、共同作業はなごやかに進んでいった。昼食の時や三時のおやつ時には、研究の情報を交換したり問題点などが話題になったりして、互いに大いに刺激をうけ、有意義であった。

このように書いてくると、いいことずくめのようにであるが、調査に際してとにかく損傷の多い俳書が多く、本をめくって破片がぼろぼろとこぼれたり、本から出るほこりやカビなどには大いに困

惑した。前掛けやマスクなどもはじめは十分用意しておらず、衣服がほこりだらけになったり、またノドを痛める調査員も多かった。館側の文献資料部の福田秀一・長谷川強・渡辺守邦・嶋原泰雄・母利司朗の諸氏には、何くれとなく細かなことまで御配慮をいただきありがたかった。撮影の方は高橋マイクロフィルムの方が担当して下さったが、調査同様、大変な思いをして撮影されたようである。その御苦労に対しても感謝申し上げます。

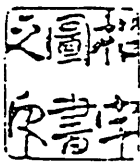
以上述べたごとく松字文庫の調査・収集は近來画期的な出来ごとといってもよからう。そうしてもう二、三年すれば紙焼きも資料館に備えられることになるから、俳諧研究者にとって大きな福音となることはまちがいないだろう。

最後にわたくしごとで恐縮だが松字文庫は恩師中村俊定先生が松字翁の指導のもとに本格的に俳諧の研究に取り組まれた文庫であり、わたしもまた学生時代から二十年以上にわたってお世話になってきた文庫である。それゆえ、このたびの調査・収集には、ひとしお感慨深いものがあつた。

〔付記〕

松字文庫は、松字没後芭蕉庵文庫と改称されて現在に至っているのだが、このたびの調査・収集ではとくに旧称松字文庫の名称を用いることを許された。講談社当局の御寛容を感謝したいと思う。なお松字の蔵書印は四種ほど確認されている。「松字図書之印」「松字文庫」「松字愛蔵門外不出」(二種)である。最後に松字の略伝を付しておこう。伊藤松字は安政六年(一八五九)長野県小県郡丸子に生れ、昭和十八年(一九四三)東京関口芭蕉庵で没した。丸子より上京して実業家を志し、のちに俳人となる。明治新派俳句運動を推進した一人で、さらに古俳書の蒐集や、翻刻・校訂や研究に従事した。俳句雑誌「筑波」を主宰し、著書に「俳諧中興五傑集」「松字家集」「俳諧雑筆」などがある。

昭和六十二年七月二三日



(昭和六一年度客員教授)

新収資料紹介②

河内三疋亭集書画帖

折本一帖。表裏各四十面に詩箋、歌稿、発句短冊、画、書簡その他、絹本紙本とりまぜて計二三八点が貼り込まれる。雲鶴文様の布表紙を持つこの折帖（竪三六・五種、横三〇・五種、厚七・一種）については既に、『混沌』第七号誌上、水田紀久氏によつてその概略と序文、所収の二書簡とが報ぜられており、かつ蒐集者三疋亭を河内山田の田中伊右衛門と推定しても居られる。文化二年仲夏三日、森川竹窓らしき人物を介して三疋亭主より請われて書かれた皆川淇園の序文を劈頭に据えるが、こゝでの表題もその序題より借りた。

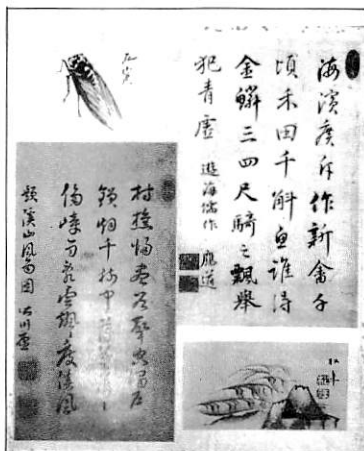
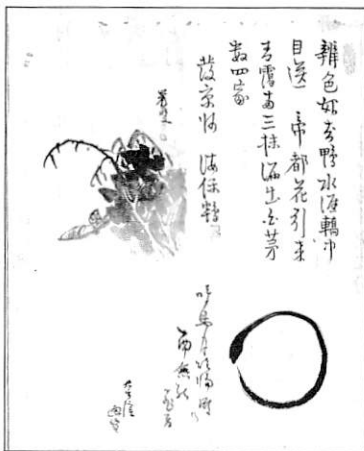
亭主の身辺からして京阪の文人・画家のものを主とするのは当然のこと乍ら、江戸よりのものも結構あり、作者の分明ならざるも多いが、今その判明する者の一端を左に掲げる。伊勢を含めた上方では畠中銅脈、森川竹窓、香川氷仙、浜田杏堂、慈雲尊者、森祖仙、森徹山、秋里離島、奥文鳴、片山北海、松本観山、

悟心、月僊、大雅堂、月峰、

龍草蘆、篠崎三島、長山孔寅、皆川淇園、海保青陵、岩垣龍溪、不二庵二柳、伴蒿蹊、浦上春琴、三宅石庵、松後、趙陶齋、岡田君章、鳥山松岳、頼春水、細合半齋、田中鳴門、岡田米山人、三熊花顛、關更、奥田拙古、岡田半江、木村兼葭堂、大江玄圃、嘯山、那波魯堂、大江丸、大原吞響、十時梅崖ら。関東では、大窪詩仏、豊島豊洲、谷文晁、谷舜英、関其寧、鈴木芙蓉、喜多武清、沢田東江、建部綾足、菊池五山、春木南湖、諸葛監、立原翠軒、宋紫石、宋紫山、市河米菴、中井敬義ら。加えて名古屋の津金胤臣などもまじる。また、費漢源ら華人、あるいは朝鮮人と思われる者の作もあり、時代は遡るが唐通事彭城東閣の詩稿なども収まる。多く小品ながら紫山の墓図、観山のカワソ図など生動の妙を得た佳作、あるいは比較的大ぶりの諸葛監の猫図、紫石の山水図、綾足の双兜図、兼葭堂の蘭図などの尤品も目を引き、羅列の美学などとうそぶかずとも、一見して巻を釈くあたわざるものがある。

巻頭淇園序文の寸法は帖の大きさに合わせたものとおぼしく、かつ各作の法量の大小に応じて緊密に貼付されている状態からしても、おりにふれ順次貼り足していったというよりは、長期に亘る蒐集物を、序文のものされた文化二年頃一時にこの巻冊に纏めたものと見做したがよからう。各作にまゝ、残る年記もそれを下るものは無く、古くは彭城東閣の元禄三年から、延享、宝曆、安永、天明、寛政、享和、文化とや、ばらつきがあるが、中で寛政・享和度が最多。年記の無いものも恐らくその頃の作が多いのではあるまいか。それも三疋亭主人に対して個人的に寄せられたものと、偶ま手元に集まったものと混然としている如くである。水田氏の紹介された兼葭堂宛片山北海・那波魯堂二尺贖をはじめ、多くの小箋に残る交誼を示す贈詩、名乗書など、当代文苑を垣見うる断片も少くない。

(研究情報部 宮崎 修多)



共同研究報告

平安前期物語の研究

植田 恭 代

いわゆる平安前期物語はどのよう
に位置づけられていくべきなの
か、「源氏物語」を頂点に据えた物
語文学の見取り図に安住すること
なく、表層の理解にとどまること
なく、個々の作品の底流にまで立
ち上ってとらえなおしてみること
はできないか。

本共同研究では「落窪物語」を
中心に、周辺諸作品をにらみあわ
せながら、平安前期の物語の側か
らの新たな問題提起とその追究を
めざしている。そのために、まず
基本方針として、できるかぎり古
い状態の本文を尊重して読み進め、
合理的解釈は一切排除してゆくこ
とを確認した。

今、平安前期物語の多くは古い
写本をみるができない。「落窪
物語」の場合も同様で、かろうじ
て室町末期の写本が数点残されて
いるばかり。しかもそのすべてに
欠陥が認められる状態であった。
ところが最近、吉田幸一氏により

古典文庫から室町中期写の「九条
家本」及び「慶長頃写本」が刊行
された。「九条家本」は戦後所在不
明になっていた幻の善本である。
もちろん「九条家本」にも共通の
欠陥はあるが、最古写本であるこ
とに疑いはなく、これによる研究
の飛躍的な進展が期待されてい
よう。

最善本の刊行という幸運に恵ま
れて、今回は「九条家本」を底本
に決めた。そして、資料館所蔵の
紙焼写真や入手可能なすべての諸
本・諸注釈書をつきあわせて、作
品冒頭からの本文校訂とそこから
生ずる問題点発掘の作業を開始し
た。毎回校訂本文を提出し、それ
をたたき台として共同討議をかさ
ね、細かい語彙・語法にも徹底的
にこだわり調査をおこなう。少し
ずつではあるが校注本の作成も進
んでおり、あわせて、研究文献目
録や引歌等の一覧も整えつつある。
近い将来の、これらの成果をとり
まとめた信頼できる校注本の出版
と研究論文の発表が、現在の目標
である。

おそらく微視的・巨視的な問題
にわたって、「落窪物語」研究の現
状に一石を投じる成果がみられる

ことなるう。予算の都合から研
究会の回数が削減され、本年度内
の完成が難しくなってしまったこ
とを残念に思いつつも、参加者一
同、目標の実現にむけて作業と討
議に挑んでいる。
(日本女子大学大学院博士課程)

江戸中期上方文壇の研究

宮崎 修 多

本共同研究は、八月に予定して
いる第一回の研究員打ち合わせに
向けて鋭意準備中の段階であり、
中間報告と称すべき動向は何も無
い。当面の展望と方法を一言する
のみ。

江戸中期の俳文芸、所謂中興期
俳諧における拠点として上方文壇
の俯瞰を企てれば、おのづとそこ
に和歌、漢詩、絵画等を含した
総合的視野が要請される事は云う
までもない。しかし乍ら、最近漸
々本格的研究の端緒についたとさ
れる和歌、あるいは漢詩文の分野
は、俳諧そのものの研究に比すれ
ばまだ立ち遅れていると云わざる
を得ぬこと、これ亦誰しも肯い得
るであろう。我々共同研究員の構
成は俳諧研究者を以て主とするが、

かかる状況に鑑み俳諧から視線を
少しくずらす事をいとわない。題
目から俳諧の二字をあえて除去し
た所以である。

とはいえ近世中期の上方文壇と
ひとくちに云っても、その間口興
行きは余りに広い。さしあたり、
おのがじし当面する課題にちなん
だ作品を、資料館所蔵のマイクロ
・紙焼写真群に分け入り獲得して
来る事を第一歩とする。勿論、地
域と時代とを截然と限定する上は、
絶えず横に拡がりを持たせる事を
目途としなければならぬ。いきお
い扱った作品数もかなり増加する事
が見込まれ、それらを整理する作
品カード類も検討中である。

何分メンバーの殆んどが遠隔の
地に住し、定期的かつ頻繁な会合
あるいは全員で一つの作業をなし
とげる事などが甚だ困難ではある
が、十分に通信を活用して情報交
換を怠らぬつもりで居る。

(国文学研究資料館助手)

江戸時代堂上和歌聞書の研究

宮崎 修 多

一、昨年度より継続していた、全
国に伝存する和歌のいわゆる「聞

書」類のカード化の作業がほぼ完了した。「国書総目録」等冊子体の目録のみからの採取だけに、資料館に紙焼の存するもの、手近に調査しうる資料等は出来るかぎりそれで確認しなす事が望まれる。そしてある程度以上の照合をなした上は、「和歌聞書略目録」のごときを作成する事を目標とする。

一、「聞書」読解の爲の視点といふべきものを模索しつ、宮部義正の冷泉為村に問うた「義正聞書」の輪読、校本作成を現在進めている。終了後は似雲の武者小路実陰からの聞書「詞林拾葉」会説により、近世歌学の性格はもとより、異本多しとされるこの歌論の対校を通して聞書の諸本研究のあるべき方向をも辿ってみる事にしたい。

一、近世和歌の研究も漸く盛んなろうとしているものの、その膨大な作品群を前にすれば、資料的整理、伝記研究等の基礎作業すら充分になされていない状況とも相俟って、作品そのものに踏み込む事に一種のためらいを感じる事は多からう。無論それでは否として何も問明されぬま、ともすれば従来、退屈、一律のそしりを免れなかつた作品群の周囲を茫々徘徊す

るのみで仕舞う。ここに至っては、ある程度の「かたより」をあえて辞さぬ覚悟で作品に参ずる事が必要となつて来るのであろう。本共同研究は、作品そのものではなく、あくまで聞書という名の歌論の考究にとどまるが、その集積、味読を通して実作に接する各々の偏したまなごしを養うことが出来れば、これはまた誠に幸いな事ではないかと思うのである

(国文学研究資料館助手)

歌舞伎番付総合目録の 標準化と編纂のための 基礎的研究

武井 協三

歌舞伎の文献資料は、大別して台本、評判記、番付が三本の柱で、それ以外の劇書と呼ばれる演劇雑書をたてれば、尽すことができよう。このうち、台本は現在刊行されている「歌舞伎台帳集成」によつて整備をみつつきあり、役者評判記も、今秋より「歌舞伎評判記集成」第二期が刊行の予定である。演劇雑書については、集成という形ではないが、「日本庶民文化史料集成」第六巻や「上方芸文叢刊」

4などによつて、その主たる部分を研究者は座右にしている。

これらに比して、番付資料の整備は「日本庶民文化史料集成」第十四、十五巻、「歌舞伎図説」などの成果があるが、資料の全体量からみれば、ごく一部が公刊されたのみであり、最も後進の分野であるといわざるを得ない。とくに浄瑠璃の興行年表が、番付の集成をふくみこんだ形で「義太夫年表近世篇」に結実した現在、歌舞伎の番付の整備は、研究者の間で、着手の必要が、痛感されていた課題であつたといえよう。

番付の整備・刊行については、関西、東京においてそれぞれ計画が進んでおり、所蔵機関の目録も個々に公刊されてきつつきある。これらの動きの中で本共同研究は、番付の整備にコンピュータを、どのように導入利用できるかという問題と、そのための基本的フォーマットの策定という問題をにらみつつ開始された。歌舞伎番付の現存数は数万点に及ぶと推察され、人力で扱える分量をはるかに越えている。コンピュータをどう利用していくかは、歌舞伎番付の研究を進める上で、ひとつの鍵とならう。

研究会は昨年度より三回程の準備会を経て、六月二十二日に第一回が開かれた。すでに関西・東京で番付整備にあたつておられる研究者を核に、東大図書館の小林元江氏をゲストに迎え、江戸の顔見番付についての報告を赤間亮氏が行つた。それをもとに、今後の番付目録の作成はどうあるべきかが検討され、異版処理や難文字の解説など、多くの問題が提起された。

第二回の研究会は、九月十一、十二日に開催された。古井秀夫氏が江戸の番付の読み取り方について、堀浩一氏がコンピュータの側から見た番付の集成について、小林元江氏が東大図書館蔵の番付の整備について、林公子氏が安永以前の番付の読み方について、それぞれ報告を行つた。

問題山積のまま二回の研究会は時間切れとなつたが、今まで個々に行われてきた、関西と東京の番付整備グループが、一堂に会し、その連絡、情報交換の場となり得たことは、ひとつの成果であつたといえよう。

(国文学研究資料館助教授)

文献資料部事業報告

長谷川 強

九名のうち三名が新人となつて新しい年度を迎えた。五月二十一日に本年度第一回の収集計画委員会、二十八日に調査員会議(総会)を開催、既に夏休前に調査に収集に御協力をいただいている。夏休は調査員各位に御活躍いただく時期であるので、さような意味で当部の多忙期の一つ。夏休のある方々を羨みつつ報告を左記に。

昭和六十一年度国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年三月末までに左の七三箇所(予備調査Ⅱ*印を含む)の所蔵資料八三九二点を調査した。なお、予備調査として*印を付したものの以外にも、展示を見ての報告など、当館としてのいわば正式な調査の手続きによらないものもあるが、それぞれ情報として有益なので記録保存することとし、ここにも掲げておく。

北海道東北地区(順不同、敬称略、一部略称、以下同じ)
弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・東北大学附属図書館(狩

野文庫)・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館

関東地区

彰考館・流通経済大学図書館(祭魚洞文庫)・茨城県立歴史館・矢口丹波記念文庫・永井義憲・東洋文庫・東京芸術大学附属図書館・東京大学国文学研究室・松宇文庫・法政大学能楽研究所(鴻山文庫)・宮内庁書陵部・大倉精神文化研究所・抱谷文庫・栃木県立博物館・栃木県立足利図書館・吉田屋鴨川館

中部地区

新潟大学附属図書館・上越市立図書館(榊原本)・高岡市立中央図書館・金沢大学附属図書館・石川県立図書館(李花亭文庫)・武生市役所(寄託本)・長野市教育委員会(真田文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・戸隠宿坊群・名古屋市蓬左文庫(尾崎コレクション)・名古屋大学図書館(神宮皇学館文庫)・鶴舞中央図書館・愛知県立大学図書館(古俳書(-))・大須文庫(真福寺)・刈谷市立刈谷図書館・神宮文庫・龍光禅寺・名古屋博物館・名古屋市豊清二

公顕彰館・名古屋市熱田社会教室センター・定光寺・西明寺・大樹寺・妙興寺・諏訪市立図書館*・高遠町文化センター
近畿地区
西教寺・舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会(小出文庫)・立命館大学附属図書館・大方保・陽明文庫・大阪女子大学附属図書館・浄照坊・温泉寺・大和文華館・広瀬神社・奈良県立奈良図書館郷土資料室・東大寺図書館
中国四国地区
萩市立図書館・西円寺・鎌田共済会図書館・松本真一・大洲市立図書館・四国女子大学附属図書館(凌霄文庫)・高知県立図書館(山内文庫)・三原市立図書館*
九州地区
佐賀某家*・島原図書館(松平文庫)・某個人(長崎市・俳書)*
白杵市立白杵図書館・沖縄県立図書館本館及び宮古分館

二、収集

本年三月末までに左の二六箇所の所蔵資料計五四〇二点を収集した。

北海道東北地区
弘前市立弘前図書館・秋田県立秋田図書館(時雨庵文庫)
関東地区

東洋文庫・東京芸術大学附属図書館・東京大学附属図書館・松宇文庫・学習院大学国語国文学研究室・東京都立中央図書館(特別買上文庫)

中部地区

金沢市立図書館(榊堂文庫)・加賀市立図書館(聖藩文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・金城学院大学附属図書館・名古屋蓬左文庫(尾崎コレクション)・刈谷市立刈谷図書館・新城市教育委員会(牧野文庫)・大須文庫(真福寺)
近畿地区
舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会(小出文庫)・陽明文庫・大方保・温泉寺
中国四国地区
多和文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館(山内文庫)
九州地区
熊本大学附属図書館(北岡文庫)・白杵市立白杵図書館

昭和六十二年度文献資料調査・収集計画(国内)

本年度は調査七三箇所七一一〇点、収集四二箇所五六三二点の計画を立てている。昨年度の松宇文庫のように短期集中方式をとる所がないので、昨年度の実績より調査点数など少なく予定をしている。

海外資料の調査・収集

一、前回記したカリフォルニア大学バークレー校所蔵田三井文庫本中心の版本・写本の収集は、昨年度注文の分が本年度初めに届いた。七六点約一五〇〇コマである。同大学関係者各位に御礼申上げる。一、本年三月下旬に長谷川が赴き、台湾大学図書館特蔵組（旧称研究図書館）所蔵本の調査結果報告・収集に関して陳興夏図書館長をはじめ関係各位におあいしお願いをした。七月に第一回の希望リストを提出、審議をお願いする。また国立中央図書館蔵本については王振鶴館長の御快諾を得、七月同時に第一回の希望リストを提出した。関係各位と、言葉の不自由な者に御協力下さった方々に御礼申上げる。

第四室

今年度は各員教授として日本大学文学部部の有吉保教授をお迎えした。同教授には調査員会議の折に百人一首の古注についての講演、関係御所蔵書の展示をお願いするなど御協力をいただいている。併任の助教には前期を信州大学人文学部の渡辺秀夫氏、後期を北海道教育大学函館分校の下西善三郎氏をお願いしている。

その他

地区会議は十月に東北・近畿地区での開催を考えている。部内の異動は、田嶋一夫助教は辞職、いわき明星大教授に、島原泰雄助手は辞職、皇学館大学助教に、母利司朗助手は岐阜大学助教に転出し、後任には広島女子大学より山崎誠助教、早稲田大学大学院より竹下義人助手、大阪市立大学大学院より樹下文隆助手を迎えた。またこの異動により新藤助教が第一室室長になった。福田教授はハンガリーより八月三十一日帰朝の予定である。異動が多かったので当分御迷惑をおかけする事があろうと思うが、変らぬ御指導・御協力をお願いする。
(文献資料部長)

文庫紹介⑨

秋田県立秋田図書館

時雨庵文庫

時雨庵文庫には、地元の俳人・郷土史家として著名な安藤和風の寄贈書約二千点が収められている（時雨庵は和風の俳号）。その全容は「時雨庵文庫目録―付書名索引」（昭和四五年刊）で明らかであるが、特に俳書方面が充実している。当館でも昭和五十四年以降俳書を中心として調査（五二〇点）・収集（三〇〇点）に努め、既にその一部はマ

書約二千五百点、「菊池・秋林・田口文庫目録」（昭四十六年刊）に藩の胆煎であった三家旧蔵書約千五百点、「根本通明遺書目録」に易学の権威者根本通明の蔵書約二千五百点などが掲載されている。

イクロ資料目録一九八六年版に掲載され、閲覧に供されている。秋田図書館にはその他にも篤志家寄贈による多くの特殊文庫があり、代表的なものだけでも「佐竹文庫目録一―三」（昭三十年、三十二年刊）に旧秋田藩主佐竹宗家・大館佐竹家・角館佐竹家の旧蔵書約八千点、「東山文庫目録」（昭三十四年刊）に教育者で郷土研究者でもあった東山太三郎寄贈書約六千点、

また「秋田県立秋田図書館和漢図書分類目録文学及語学之部上・下」（大二、三年刊）や「郷土文献目録」（昭十四年、三十六年、四十二年刊）、「秋田県歴史資料目録九」（昭四十八年刊）等にも膨大な資料が記されており、その中には伊勢物語等の古活字本や貴船の本地等の奈良絵本、和歌口伝開書をはじめとする写本類も少なからず存している。更に目録以外にも五千五百点以上の蔵書がカードによって検索される。最近も篤志家からの寄贈が続いており、嫁入本栄花物語など興味深い書物が少なくない。

「戸村文庫目録」（昭三十七年刊）に横手城城代戸村義得寄贈書約五千点、「狩野・岡文庫目録」（昭三十八年刊）に旧藩士である両家の旧蔵

秋田県立秋田図書館奉仕課
(秋田駅徒歩十分)
〒〇一〇
秋田市千秋明徳町二番五二号
電話(〇一八八)三九一―五六八
(文献資料部 吉海直人)

研究情報部事業報告

棚町 知 彌

今年度は、三月転出の百川助教授にかわって、情報室長武井助教の着任からはじまり、七月一日より、情報処理室長安永教授が、二カ月の短期在外研究に出た。研究情報データベース化の第二走者として、「研究文献目録」がスタートラインにつく。本プロジェクトについては、データ作成も当部（編集室）の担当である。情報処理室では、データベース化などのシステム開発と並行して、これまで実地使用中の諸システムの再構成をすすめているなかで、本年度後半にはマシンの更強化も予定している。

情報室

情報室では、館報発行、新聞情報の収集、国際日本文学研究会の開催業務を担当している。昨年の国際集会は第十回の記念集会で、盛会であった（第十回集会の「会議録」の内容は下段のとおり）。年々充実した集会となっているためか、本年度も研究会発表希望者の一段の増加をみ、定数の二倍以上の

応募のなかからプログラム編成にあたられる、国際研究会委員会には、うれしい悲鳴をあげた。いわば「安定成長」期に入っていることからのみちは、かえってけわしいと自戒している。ひろく学界の御鞭撻をお願いする。

編集室

『国文学年鑑』（昭和六〇年版）を三月末予定通り刊行した。

今回から年鑑の主要部分である雑誌紀要単行本（論文集等）論文目録の部分はCTS（コンピュータ・タイプセティング）による組版を行って作成したが、従来とほぼ同じ縦組の見易い体裁とすることができた。しかもこれと同時にデータベースの元となるデータが作られ、すでに磁気テープで納入されている。

今年度編集する六一年版では、CTS化をさらに一歩進めて、新聞所載論文目録単行本目録もCTS化するとともに、

収載雑誌紀要一覧

発行所一覧
単行本書名一覧
翻刻複製一覧
執筆者索引

を、新に原稿を起すことなく、コンピュータがそれぞれの目録からデータを抽出し、辞書によりヨミや発行所アドレスなどを付加し、五十音順に並べかえてなるべく自動的に作成できるよう開発を進めている。

また今年（六二年）一月からの六二年版用原稿については、論文から原稿を作成する最初の段階から論文が対象とされている作品名、作家名のキーの付されたデータシートを作成し、データベースのデータとしても、そのまま、利用できるようにしている。これにより六二年以後の論文目録のデータベース化への見通しがほぼ立てられる状況となった。

なおCTS化する以前のデータの内、昭和五六年までは年鑑のデータを逐次入力して来たが、五七、五八、五九年の三年分の入力が行なわれず欠落していた。しかし幸い今年度科学研究費補助金研究成果刊行費（データベース）「国文学論文データベース」の交付を受け、

国際日本文学研究会会誌録（第10回）
あいさつ 小山 弘
写真集
8世紀東アジア政治状況の中における万葉集の成立
山口 博（富山大学）

古事記と近親相姦
村上史展（シカゴポール国立大学）
神文学の特殊性―道元の数えと良寛―
石上・イアゴルニツァー美智子
（フランス国立科学研究所）
日本文学における感情の表現
―謡曲「隅田川」の「クドキ」の小段―
レオン・ゾルブラッド
（アリエティシユ・コロンビア大学）
没理想論争の今日の意味
大嶋 仁（静岡大学）

賢治童話におけるイノセンス
萩原孝雄（フロリダ大学）
カール・フロレンツの日本文学史
―上代文学史を中心に―
佐藤マサ子（お茶の水女子大学大学院）
現代文学批評によって
「文学史」を考えなおす
ジョン・ウイティア・トゥワート
（ワシントン大学）

戦後日本文学における西洋人のイメージ
鶴田欣也（アリエティシユ・コロンビア大学）
源氏物語―光源氏の榮華と予言―
金鐘徳（東京大学大学院）
抜群の古典をよみかえろ―加藤道夫社、なよたけ―
ケネス・リチャード（トロント大学）
竹取物語とフランス中世の短篇物語
小沢正夫（中京大学）
シンボジウム・日本文学史について
加藤周一（評論家）
ドナルド・キーン（コロンビア大学）
小西英一（筑波大学名誉教授）

《公開講演》
日本文学における「終わり」の感覚
上田 真（スタンフォード大学）
「寫す」ということ
―近代文学の成立と小説論―
ジャン・ジャック・オリガス
（フランス国立東洋言語文化研究所）

それらが入力されることになったので、昭和一六年以降六一年まで四六年間のデータの蓄積が一応実現されることになった。

オンライン逐次刊行物目録システム
逐次刊行物目録システムをオンライン化し、対話型の運用管理を可能にした。

③ 運用管理システム

電子計算機の運用・運転を除く昭和六十一年度事業は、以下のよう
に実施した。

利用者の要求定義からプログラム作成までを一貫して管理し、運用管理データを採用する開発環境的なシステムの開発を行った。

① 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(一九八六)

④ データベースサービシステム

② 同累積簡略版(業務用)

マイクロ資料目録および和古書目録のデータを一般ユーザにオンラインで提供するためのシステムの開発を行った。

③ 国文学研究資料館蔵和古書目録(一九七二—一九八六)

⑤ マイクロ資料目録システム改造

上記目録用データおよびその他のデータ、あわせて七一六三九件のデータ入力を行った。

マイクロ資料の増加に対処するための、システム改造を行った。

(3) システム開発

⑥ マイクロ資料目録データ一貫性維持システム

以下のシステム開発を行った。

① 古典籍総合目録作成システム

累積データ作成にとまない、データの一貫性を保証するためのシステムの開発を行った。

中間版目録作成システムの開発を行った。これにより、現在まで累積された書誌、著作、著者等のデータが目録という形で利用可能となる。

(研究情報部長)

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

当館は創設から五年の準備期間を経て昭和五十二年七月に開館した。以来、所蔵者、関係機関等の協力により所蔵資料が充実してきている。利用者も着実に増加してきている。今年度は開館十周年を迎える節目の年に当たり、四月からはマイクロ資料目録データベース及び和古書目録データベースのオンライン検索サービスがスタートした。これにより近年大幅な伸びを示している相互利用がますます増加し、マイクロ資料及び和古書の複写申込件数の増加への対応を迫られることが予想される。

一方、事業開始後七年目を迎えた古典籍総合目録作成事業は、昭和六十一年度に試作版目録作成システムの開発を終え、これにより現在まで累積された書誌、著作、著者等のデータを目録として利用できる条件が整った。これに合せて古典籍総合目録委員会を三月十九日、五月二十九日に開催し、試作版目録作成システムにより出力した目録版下(案)にもとづき審議する等、冊子体目録作成に向けて最終的調整を行っている。これに関連して、これまで受入係担当としてきた古典籍総合目録作成事業は、関連業務との整合性を維持し、効率的に業務を進めるため、整理係担当に改めることとし、四月に異動を行った。

また、昭和六十年度から実施している保存用ネガフィルムの外部保管委託は、昭和六十年度収集分九七一リールを加え一四、一〇二リールの保存用ネガフィルムについて実施している。

この他、当部が担当する業務(資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等)は順調に進展した。

(一) 整理閲覧室

(1) 受入業務

昭和六十一年度の受入資料数は、マイクロ資料(ロールフィルム九六八リール、紙焼写真本二、七一七冊)、図書(一、八〇七冊)、逐次刊行物(継続受入等約一、六

四〇誌）、雑誌製本（三五五冊）であった。その結果、昭和六十一年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

昭和六十二年度も、予算の確定に伴い、例年どおり資料の受入れを行っている。ひきつづき、図書選定小委員会その他の協力を得ながら国文学関係資料を中心に周辺領域を含めて総合的な収集・受入れに努めたい。

(2) 整理業務
『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八六年』を例年通り刊行した。二八文庫、八、三九七点

が収録されている。引き続き次の目録のためのデータ作成に取りかかり、既に五、八四〇点のパンチ入力を終えた。

『国文学研究資料館蔵和古書目録一九七二―一九八六』を刊行した。昭和六十一年度までに当館が受入れた和古書約六、〇〇〇点の累積目録であり、可能な限り過去の目録中の誤まりや不適切な記述の訂正も行ってきている。今後も五年ごとに累積目録を刊行していく予定である。

今年度で四年目を迎えた古典作品典拠ファイルは、現在まで約四

万件のデータを作成し、古典籍総合目録の著作データベースへの登録を行った。このデータを用いて、書誌データの著作コントロールを進めつつあり、古典籍総合目録の作業と呼応しながら、効率的な作業体制を確立することが課題である。

新刊書整理、帙作成、補修等の定常的業務は例年通りである。なお、資料保存の見地から、和紙を用いた和古書専用のラベルを新たに作成した。

(3) 古典籍総合目録作成事業
情報処理室で進められていた目録出力システムが完了し、版下のテスト出力を行った。記載事項やレイアウト等出力形式の最終的確認を行うため、館外有識者を混えた委員会に出力リストを提出し、意見を伺った。仕様を作成する時点で一応の出力形式は決定しているものの、それは言わば机上のデザインであり、テスト出力によって、実際の目録に近い形で見ることができるようになった時、調整を必要とする部分が出てくることは避け難く、問題点がいくつか指摘された。請求記号の扱いを中心に、二度にわたって活発に議論さ

れたが、最終的な判断は当館に任せられた。
実作業の面では、昭和六十三年度末の印刷体冊子目録の刊行に向けて、書誌データの点検・パンチ入力、データベースへの登録、著作コントロール等の一連の処理を進めた。
関連して、古典作品典拠ファイル作成事業により作成された著作データの登録、及び著者コントロール、索引作成に利用する著者ファイルデータについて、読みの付与や別称の登録等を平行して進めている。

(4) 閲覧業務
昭和六十一年度は、来館利用による入室者数が八、七七一（一日平均三二人）、文献複写が一九、〇三三件（一日平均六九件）で、いずれも前年度に比べて増加した。利用登録者数は累計（三月末まで）で一七、二五四人に達した。相互利用（郵送による文献複写・貸出）の申込受付が一、三九〇点で、前年度に比べて三八%増であった。

四月からは、マイクロ資料目録データベース及び和古書目録データベースのオンライン検索サービスがスタートした。

四月末から五月上旬にかけての休室期間中に、紙焼写真本の入換え作業を実施した。これは、いまままで二階閲覧室に開架してあったものを書庫へ移し、書庫のものによって、新規分が開架されることになった。
なお、例年通り、三月末に蔵書点検、四月末に資料のくん蒸を実施した。

(5) マイクロ室業務
弘前市立図書館他二二文庫、六八五リールの作業用ネガフィルム

所蔵資料統計

(昭和62年3月末現在)

資料種別	点数 冊(リール)数	
	マイクロ資料	77,003点
マイクロフィルム*	3,680点	11,143枚
マイクロフィッシュ	48,860点	40,605冊
紙焼写真本	19,443点	62,854冊
図書(古書及び新刊書)	3,175誌	80,169巻号冊
逐次刊行物	141点	178冊
寄託図書		

*他に紙焼写真による収集がある。

を作製し整理した。閲覧用ポジフィルムは、多和文庫他一四文庫、五七二リールの加工、整理をした。紙焼写真本は、一、二六九冊の製本、装備を行った。

(二) 参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

● 第26回公開講演会（6月13日、於当館）

「雁の世界」寿岳章子氏（前京都府立大学教授）、「西鶴雑談」前田金五郎氏（専修大学教授）

● 常設展示

第33回「平安朝物語」（1月19日）

第34回「和書のみまざま」（4月13日）

なお、昨夏の第9回夏期公開講演会の筆録集である『軍記物語の展開（国文学研究資料館講演集8）』を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。

（整理閲覧部長）

昭和62年度共同研究

本年度共同研究は「国文学研究資料館報」28号に既に掲載したものの他に、外国人研究員として、客員教授ローラント・シュナイダー氏を迎え、「日本文学の特質——七十一番職人歌合の研究——」が加わった。研究期間は昭和六二年七月十日〜十二月九日（または六三年三月三十一日）である。

メンバーは同氏の他、左のとおり。

- 網野 善彦 神奈川大学短期大学 学部教授
- 岩崎 佳枝 梅花女子短期大学 国語課非常勤講師
- 大島 建彦 東洋大学文学部 教授
- 島津 忠夫 大阪大学教養部 教授
- 棚町 知彌 国文学研究資料館 研究情報部 教授
- 徳田 和夫 学習院女子短期大学 学助教授
- 福田 秀一 国文学研究資料館 文献資料部 教授
- 岡見 正雄 中京大学 教授

（協力者）

第11回 国際 日本文学 研究 集会

11th International Conference on Japanese Literature in Japan

とき：昭和62年11月6日(金)〜7日(土) ところ：国文学研究資料館

11月6日(金)

あいさつ (13:20)

研究発表 (13:30〜17:10)

①「萬葉集」の賛歌と「詩経」の頌詩
——國家形成期における発想の探求を中心とする——

②万葉集の「今夜」「明日」について

③演劇における八百屋お七像

④からくりと竹本義太夫
——人形浄瑠璃史の転換点——

⑤シュルレアリスムの絵を先取りした朔太郎の詩

⑥円地文学における「靈的なもの」

小山 弘 志(国文学研究資料館長)

孫 久 富 (北京国際関係大学)

榎 岡 耕 二 (東京大学)

Valerie Durbin (お茶の水女子大学大学院)

阪 訪 春 雄 (学習院大学)

月 村 麗 子 (トロント大学)

Eileen B. Mikals-Adachi (お茶の水女子大学大学院)

11月7日(土)

研究発表 (10:30〜12:15)

⑦をみなへし・あさかほ、そして紫式部のあさかほ

⑧「讀岐典侍日記」の表現

⑨六条家歌人の個性、特に藤原清輔の場合

宋 貴 英 (中央大学大学院)

林 水 福 (輔仁大学)

Reuben M. Gerling (長岡技術科学大学)

公 開 講 演 (13:20〜15:50) —聴講無料—

日本文学におけるパロディ

——近世的変容方法としてのパロディ——

Roland Schneider (ハンブルグ大学教授)

(国文学研究資料館客員教授)

Patrick G. O'Neill (ロンドン大学名誉教授)

曲

用 語

参 加 費

申 込 方 法

参加申込締切

連 絡 先

日 本 語

3,000円(当日受付)

はがきに①氏名 ②住所 ③現職(所属)④専攻 を記してお申し込みください。

昭和62年10月31日(土)

国文学研究資料館 研究情報部 情報室

〒142 東京都品川区豊町1-16-10 電話 03(785)7131 内線 402・222

第17回特別展示 11月2日(月)〜11月14日(土) (日曜・祝日を除く) 於：展示室

絵巻・絵本ならびに版本の挿絵

国文学研究資料館評議員

- 任期 昭和61年7月1日、昭和63年6月30日
- 阿部秋生 東京大学名誉教授、実践女子大学名誉教授
 - 猪瀬 博 学術情報センター所長、東京大学名誉教授
 - 今井源衛 梅光女学院大学文学部教授、九州大学名誉教授
 - 上山春平 京都国立博物館館長、京都大学名誉教授
 - 小田周 立教大学文学部教授、日本近代文学館理事長
 - 加藤周一 学習院大学名誉教授
 - 児玉幸多 国立劇場会長
 - 斎藤 正 甲南女子大学文学部教授、京都大学名誉教授
 - 阪倉篤義 早稲田大学文学部教授
 - 神保五彌 梅花女子大学文学部教授、大阪大学名誉教授
 - 田中 裕 国立歴史民俗博物館館長、東京大学名誉教授
 - 土田直鎮 大阪文化財センター理事長
 - 坪井清足 慶應義塾大学名誉教授
 - 中井信彦 早稲田大学文学部教授
 - 橋本不美男 国立国語研究所名誉所員
 - 林 大 東京大学名誉教授
 - 古島敏雄 東京大学名誉教授
 - 松田智雄 大阪教育大学名誉教授
 - 宮川 満 東京大学名誉教授
 - 山本達郎 東京大学名誉教授
- 国文学研究資料館運営協議員**
- 任期 昭和61年8月1日、昭和63年7月31日
- 秋山 虔 東京女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
 - 有吉 保 日本大学文学部教授
 - 伊藤 正義 大阪市立大学文学部教授
 - 久保田 淳 福島大学教育学部教授
 - 小林清治 名城大学文学部教授、京都大学名誉教授
 - 佐竹昭廣 久留米大学文学部教授、九州大学名誉教授
 - 秀村選三 千葉大学文学部教授、東京大学名誉教授
 - 尾藤正英 慶應義塾大学附屬研究所道文庫長、同教授
 - 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
 - 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
 - 棚町知彌 国文学研究資料館研究情報部教授
 - 長谷川 強 国文学研究資料館文献資料部教授
 - 福田秀一 国文学研究資料館文献資料部教授
 - 藤村周一 国文学研究資料館史料部教授
 - 本田康雄 国文学研究資料館管理開発部教授

- 森 安彦 国文学研究資料館史料部教授
 - 安澤秀一 国文学研究資料館史料部教授
 - 安永尚志 国文学研究資料館研究情報部教授
 - 山中光一 国文学研究資料館文献資料部教授
 - 渡邊守邦 国文学研究資料館文献資料部教授
- 国文学文献資料収集計画委員会委員**
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 朝倉治彦 鶴見大学文学部教授
 - 池田利夫 大阪女子大学文学部教授
 - 片桐洋一 宮城教育大学教育学部教授
 - 金沢規雄 早稲田大学文学部教授
 - 鳥越文蔵 早稲田大学文学部教授
 - 春田 宣 國學院大学長、同文学部教授
 - 本田義憲 京都外国語大学外国語学部教授
 - 松本隆信 慶應義塾大学附屬研究所道文庫長、同教授
 - 百瀬今朝雄 東京大学史料編さん所教授
 - 米倉利昭 佐賀大学教育学部教授
- 文獻目録委員会委員**
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 池内輝雄 大妻女子大学短期大学部教授
 - 揖斐 高 成蹊大学文学部教授
 - 遠藤 宏 成蹊大学文学部教授
 - 久保田 淳 東京大学文学部教授
 - 小島孝之 立教大学文学部教授
 - 小町谷照彦 東京学芸大学教育学部教授
 - 滝藤満義 横浜国立大学教育学部助教授
 - 田中榮一 新潟大学教育学部教授
 - 濱野卓也 山口女子大学文学部教授
 - 原 道生 明治大学文学部教授
 - 安田尚道 青山学院大学文学部助教授
 - 吉田照生 大妻女子大学文学部教授
- 情報処理システム運用委員会委員**
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 石田晴久 東京大学大型計算機センター教授
 - 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
 - 井上 如 学術情報センター教授
 - 宇賀正一 国立国会図書館総務部情報処理課長
 - 杉田繁治 国立民族学博物館第五研究部助教授
 - 照井武彦 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
 - 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
 - 濱田啓介 京都大学教養部教授

- 星野 聰 京都大学大型計算機センター教授
 - 堀内秀晃 青山学院大学文学部教授
 - 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 国文学文献資料調査員**
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- (北海道・東北)
- 白田昭吾 弘前大学人文学部助教授
 - 片野達郎 東北大学教養部教授
 - 金沢規雄 宮城教育大学教育学部教授
 - 神山重彦 山形大学教養部助教授
 - 中村一基 岩手大学教育学部助教授
 - 名子喜久雄 山形大学教育学部助教授
 - 錦 仁 秋田大学教育学部助教授
 - 藤田洋治 鶴岡工業高等専門学校講師
- (関東)
- 板坂則子 群馬大学教育学部助教授
 - 岩崎雅彦 法政大学能楽研究所所員(非)
 - 宇田敏彦 戸板女子短期大学教授
 - 片桐 登 法政大学第一教養部教授
 - 川島絹江 東京成徳短期大学講師
 - 川村晃生 慶應義塾大学文学部助教授
 - 篠原 進 青山学院大学文学部助教授
 - 諏訪春雄 学習院大学文学部助教授
 - 竹本幹夫 早稲田大学文学部助教授
 - 辻 勝美 日本大学文学部講師
 - 鳥居フミ子 東京女子大学文学部助教授
 - 鳥越文蔵 早稲田大学文学部教授
 - 延廣真治 東京大学教養学部助教授
 - 花井滋春 関東学院女子短期大学講師(非)
 - 林 達也 駒澤大学文学部教授
 - 原 道生 明治大学文学部教授
 - 古相正美 國學院大学日本文化研究所嘱託研究員
 - 牧野和夫 実践女子大学文学部助教授
 - 宮本瑞夫 立教大学文学部教授
 - 宮本瑞夫 立教女学院短期大学教授
- (中部)
- 荒木 浩 愛知県立女子短期大学講師
 - 梅原恭則 信州大学教育学部助教授
 - 大谷俊太 南山大学文学部講師
 - 木越 治 金沢大学教養部助教授
 - 黒 彰 愛知県立大学文学部講師

- 沢井 耕三 愛知大学文学部教授
- 塩村 耕三 岡山大学文学部短期大学部講師
- 島原 泰雄 皇學館大学文学部助教
- 鈴木 孝庸 新潟大学教養部助教
- 鷹尾 純 愛知淑徳短期大学助教
- 滝澤 貞夫 信州大学教育学部教授
- 田中喜美春 名古屋大学教養部教授
- 長友千代治 愛知県立大学文学部教授
- 服部 仁 同期大学文学部助教
- 澤久昭 長野工業高等専門学校教授
- 松城俊太郎 新潟大学文学部助教
- 母利 司朗 岐阜大学教育学部助教
- 安田 文吉 南山大学文学部助教
- 山口 博 富山大学文学部教授
- 山本 一 金沢大学教育学部助教
- 渡邊 信和 同期学園佛教文化研究所研究員
- (近畿)
- 阿部 泰郎 大阪大学文学部助手
- 池田 正志 甲南高等学校教諭
- 大高 洋司 甲南女子大学文学部助教
- 大取 一馬 龍谷大学文学部助教
- 神尾 暢子 大阪教育大学教育学部教授
- 菊川 丞 関西外国語大学外国語学部助教
- 高橋 喜一 梅花女子大学文学部教授
- 中嶋 隆 大谷女子大学文学部講師
- 橋本直紀 羽衣学園短期大学助教
- 廣田 哲通 大阪女子大学芸術学部助教
- 源 義春 神戸女子大学講師(非)
- (中国・四国)
- 浅野日出男 山陽女子短期大学助教
- 石川 一 広島女子大学文学部助教
- 井出 幸男 高知大学教育学部助教
- 河合 眞澄 愛媛大学教養部助教
- 辛島 正雄 徳島大学教養部助教
- 下垣内和人 広島文教女子大学短期大学部教授
- 松尾 葦江 鳥取大学教育学部助教
- 渡辺 意司 梅光女学院大学文学部助教
- (九州)
- 板坂 耀子 福岡教育大学教育学部助教
- 小川 幸三 熊本短期大学教授
- 小川 豊生 大分工業高等専門学校講師
- 工藤 重矩 福岡教育大学教育学部助教

- 久保田啓一 有明工業高等専門学校助手
- 田中道夫 佐賀大学教養部教授
- 中野三敏 九州大学文学部教授
- 中本 環 熊本大学教育学部教授
- 国文学文献資料特別調査員
- 伊藤 正義 大阪市立大学文学部教授
- 岡田喜久男 梅光女学院大学短期大学部教授
- 片山 剛 神戸学院女子短期大学講師(非)
- 小林 健二 大谷女子大学文学部講師
- 佐藤 恒雄 香川大学教育学部教授
- 白井 宏 四国女子大学文学部助教
- 鈴木 重三 白百合女子大学文学部教授
- 武井 和人 埼玉大学教養部助教
- 土井 憲治 愛媛大学法文学部助教
- 富久和代 学野院大学文学部教授
- 名和 修 陽明文庫主事
- 西村 聰 金沢大学文学部講師
- 浜口 雅教 兵庫県立川西明峰高等学校教諭
- 松原 二郎 鶴岡工業高等専門学校教授
- 松原 秀明 金刀比羅宮図書館嘱託
- 森田 蘭 四国女子大学文学部教授
- 国際日本文学研究会委員会委員
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 池田 重 青山学院大学文学部教授
- ドナルド・キーン コロンビア大学教授
- アラン・タニー 清泉女子大学文学部教授
- 芳賀 徹 東京大学教養学部教授
- 長谷川 泉 学習院大学講師(非)
- 共同研究委員会委員
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 稲賀 敬二 広島大学文学部教授
- 大曾 根章介 中央大学文学部教授
- 島津 忠夫 大阪大学教養部教授
- 曾 倉 岑 青山学院大学文学部教授
- 中野 三敏 九州大学文学部教授
- 松崎 仁 立教大学文学部教授
- 古典籍総合目録委員会委員
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 菊地 勇次郎 大正大学文学部教授
- 坂下 精一 国立国会図書館古典籍課長
- 柴田 光彦 跡見学園女子大学文学部教授

- 久文 東京大学附属図書館事務部長
- 精二 お茶の水女子大学教育学部教授
- 堤 彰 梅花女子大学文学部教授
- 共同研究員
- 任期 昭和62年4月1日、昭和63年3月31日
- 藤井 貞和 東京学芸大学教育学部助教
- 高橋 亨 名古屋大学教養部助教
- 菊地 仁 山形大学文学部助教
- 植田 恭代 日本女子大学大学院博士課程
- 櫻井 武次郎 観和女子大学文学部教授
- 清登 典子 放送大学埼玉学習センター助教
- 藤田 真一 京都府立大学女子短期大学部助教
- 母利 司朗 岐阜大学教育学部助教
- 森崎 俊彦 神戸山手女子短期大学講師
- 塩 彦彦 四国女子大学文学部教授
- 渡邊 志津子 大阪大学医療技術短期大学部講師
- 井上 宗雄 立教大学文学部教授
- 佐藤 恒雄 香川大学教育学部教授
- 紙 宏行 早稲田大学女子短期大学部専任講師
- 兼築 信行 早稲田大学高等学院教諭
- 山田 洋嗣 福岡大学文学部講師
- 今井 明 聖光学院中等学校教諭
- 湯浅 忠夫 学習院大学大学院博士課程
- 流石 文 桐明女子高等学校講師(非)
- 中川 博夫 慶應義塾大学大学院博士課程
- 鳥越 文蔵 早稲田大学文学部教授
- 土田 衛 大阪女子大学芸術学部教授
- 原 道生 明治大学文学部教授
- 古井 秀夫 早稲田大学文学部助教
- 赤 公子 大阪大学大学院博士課程
- 市 間 亮 早稲田大学大学院博士課程
- 鳴 中道 東京学芸大学文学部助教
- 市古 夏生 白百合女子大学文学部助教
- 掛 斐 高 成蹊大学文学部教授
- 鈴木 淳 國學院大学日本文化研究所助教
- 林 達也 駒澤大学文学部教授
- 島原 泰雄 皇學館大学文学部助教
- 和田 道子 愛知県立大学外国語学部講師(非)
- 清水 素子 國學院大学日本文化研究所嘱託研究員
- 古相 正美 東京大学大学院博士課程
- 鈴木 健一 東京大学大学院博士課程
- 坂内 泰子 東京大学大学院博士課程

委員会日誌
昭和六十二年

六十三年度概算要求について協議
が行われた。

期間 昭和62年6月2日、昭和
62年6月13日

文部事務官(会計課長) 牧口 勉
(埼玉大学より)

5月14日 国際日本文学研究集
会委員会(第一回)

外国人研究員
ローラント・シュナイダー

海外出張
安永尚志

文部事務官(庶務課課長補佐) 佐
藤 整(東京大学より)

5月21日 国文学文献資料収集
計画委員会(第一回)

ドイツ連邦共和国 ハンブルク
大学教授

渡航先 アメリカ合衆国・連合
王国

文部事務官(会計課課長補佐) 石
渡 孝義(東京大学より)

5月28日 国文学文献資料調査
員会議(総会)

研究題目 七十一番職人歌合の
研究

目的 情報通信ネットワークの
構成と知能化に関する研
究

(転出) 昭和62年4月1日付
文部教官(文献資料部助手) 母利
司朗(岐阜大学へ)

5月29日 古典籍総合目録委員
会(第一回)

期間 昭和62年7月10日、昭和
62年12月9日

期間 昭和62年7月1日、昭和
62年8月31日

文部事務官(会計課長) 古谷 忠
司(三重大学へ)

7月8日 共同研究委員会(第
一回)

内地研究員
原水民樹

研修旅行
岡 雅彦

文部事務官(庶務課課長補佐) 石
川 純男(東京大学へ)

7月22日 文献目録委員会(第
一回)

現職 徳島大学総合科学部助教
授

渡航先 アメリカ合衆国

文部事務官(会計課課長補佐) 太
田 重男(横浜国立大学へ)

8月20日 国際日本文学研究集
会委員会(第二回)

研究題目 保元物語の形成と変
容に関する研究

目的 旧三井文庫所蔵江戸時代
版本の調査

(辞職) 昭和62年3月31日付
文部教官(文献資料部助教) 田
嶋 一夫(いわき明星大学就職)

8月27日 文献目録委員会(第
二回)

期間 昭和62年9月1日、昭和
63年2月29日

人事異動(昭和62年3月、昭和62
年8月)

文部教官(研究情報部助教) 百
川 敬仁(明治大学就職)

評議員会議の開催について
本年度第一回評議員会議が、昭
和六十二年七月十七日(金)に開催
され、議事は、管理運営の概況、
昭和六十一年度事業報告及び昭和
六十三年度概算要求について評議
が行われた。

山口真琴
現職 高知大学人文学部講師

(採用) 昭和62年4月1日付
文部教官(文献資料部助教) 山
崎 誠

文部教官(文献資料部助手) 島原
泰雄(皇學館大学就職)

昭和六十一年度事業報告及び昭和
六十三年度概算要求について評議
が行われた。

期間 昭和62年9月1日、昭和
63年2月29日

文部教官(研究情報部助教) 武
井 協三

(客員教授) 昭和62年4月1日、
昭和63年3月31日

運営協議員会議の開催について
本年度第一回運営協議員会議が、
昭和六十二年七月十日(金)に開催
され、議事は、管理運営の概況、
昭和六十一年度事業報告及び昭和
六十一年度事業報告及び昭和

文書館業務に関する職員の研修
小島加代子
現職 北海道立文書館資料課私
文書係主任

文部教官(文献資料部助手) 竹下
義人

文献資料部 有吉 保(日本大学
教授)

昭和六十一年度事業報告及び昭和

研修内容 文書館学及び文書館
資料の取り扱い

文部教官(文献資料部助手) 樹下
文隆

(兼任) 昭和62年4月1日、昭和
62年9月30日

昭和六十一年度事業報告及び昭和

資料の取り扱い

(転入) 昭和62年4月1日付

文部教官(文献資料部助教) 渡
邊 秀夫(信州大学助教)

利用者へのお知らせ

◆オンライン検索サービス—来館利用について

当館では昭和六十二年四月から、データベースのオンライン検索サービスを開始しました。「マイクロ資料目録データベース」と「和古書目録データベース」が、書名及び著者名から検索することができます。

利用方法としては、①遠隔利用、②来館利用、の二つがありますが、現在のところ、遠隔利用は、私費、個人の利用はできませんので、以下、来館利用について説明します。

- ・利用手続
申込書（データベース利用申請書）に必要事項を記入し、カウンターにお申込み下さい。端末機はカウンター脇にあります。
- ・利用時間
九時三〇分～一六時（月～金）
- ・利用料金
TSSジョブ料金（電算機との接続時間）…1分につき1円
CPU使用料（中央処理装置使用時間）…1秒につき6円
データベース使用料…1回に

つき40円
出力料（用紙代）…1枚につき4円
詳しくは係員におたずね下さい。

◆紙焼写真本の入れ換えについて
これまで紙焼写真本の配置は、「マイクロ資料目録」の一九七六年（第1冊）～一九八一年（第5冊）収載分が閲覧室、一九八二年（第6冊）～一九八六年（第10冊）収載分が書庫となっていました。このたび、閲覧室のものと書庫のものとの入れ換えを行いました。新しい配置については、閲覧室の紙焼写真本書架にある「紙焼写真本配架一覧」をご覧ください。

◆紙焼写真本の利用について
紙焼写真本は、マイクロフィルムから印画紙に焼き付けし製本したものです。現在、当館では約四万二千冊の紙焼写真本を作成、所蔵しています。以下、紙焼写真本の利用についてご説明します。

- ①検索方法
「マイクロ資料目録」を引いて下さい。マイクロフィルムのうち、

約半分は紙焼写真本が作成されています。目録中、フィルムの種類の箇所に「C」と表示のあるものは、紙焼写真本があることを示しています。また、「C」と表示のあるものには、必ず紙焼写真本請求記号（アルファベット+数字）が記載されています。

そのほか「マイクロ資料目録データベース」によるオンライン検索で探すこともできます。もちろん、開架分の紙焼写真本については、直接ご覧になって探していただいても結構です。

②分類記号
紙焼写真本請求記号のアルファベットは、分類記号です。分類記号は、次のとおりです。
〔国文学関係〕
A…文学総記
B…歌謡・詩
C…和歌
D…連歌・俳諧
E…物語・小説
F…随筆・日記
G…思想文学・評論
H…劇文学

- 〔その他〕
J…一般総記
K…国語
L…漢籍（経史子）
M…漢籍（集）
N…歴史
O…思想
P…地誌
Q…民俗・風俗

I…漢詩・漢文
R…芸術・芸能
S…雑著

③配置
開架分（閲覧室）は次のとおりです。
A11
B201
C7001
D3001
E4001
F1001
H601
I401
J11
K401

④複写申込
複写申込書に必要事項を記入しカウンターにお申込み下さい。紙焼写真本を直接、複写機で複写はいたしません。複写は、フィルムから行いますので、請求記号は、紙焼写真本請求記号ではなく、フィルム請求記号をお書き下さい。

⑤一夜貸し
紙焼写真本は、一夜貸しのサービスを行っています。ただし、サービス区分A・Bのものに限られます。一回十点以内で、翌日の正午までに必ず返却して下さい。

昭和六十二年秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会 ①千一〇一 千代田区神田 神保町二一四六第二十勝ビル
 教育出版センター新社内
 ②八月二五〜二六日③岡山大学 文学部

近代語学会 ①千一六〇 新宿区北新宿三一一〇一〇一五〇七
 国語学会 ①千一〇一 千代田区神田 錦町三十一 武蔵野書院気付
 ②十月二四〜二五日③岐阜大学

古事記学会 ①千一五〇 渋谷区東四一〇一 二八国学院大学文学部
 部 日本文学第二研究室

古代文学会 ①千一六四 中野区中野五一一九一六一二〇 西五條 勉方

上代文学会 ①千一五〇 渋谷区東四一〇一 二八国学院大学文学部
 部 日本文学第一研究室

説話文学会 ①千四五三 名古屋市中村区稲葉地町七一 同朋大学

沼波政保研究室内②二月五日 相模女子大学

全国大学国語国文学会 ①千一〇一 千代田区猿樂町二一八一一三 桜楓社気付②一月二二〜二三 日③常葉学園大学・同短期大学

中古文学会 ①千一五〇 渋谷区東四一〇一 二八国学院大学日本文学部第四(小林)研究室内②一月二四〜二五日③新潟大学人文学部

中世文学会 ①千一四一 品川区大崎四一一一 二六立正大学文学部
 国文学科第一研究室内②一月二四〜二六日③ノートルダム清心女子大学

日本演劇学会 ①千一六〇 新宿区西早稲田一六一一 早稲田大学演劇博物館内②一月三十一日③同志社大学

日本歌謡学会 ①千一五〇 渋谷区東四一〇一 二八国学院大学文学部第七研究室内②一月一四〜一五 日③同志社大学

日本近世文学会 ①千一五四 世田谷区駒沢一―二三―一 駒沢大学文学部富士昭雄研究室内②一月二一〜二三 日③松蔭女子学院大学

月二一〜二三 日③松蔭女子学院大学

日本近代文学会 ①千一九二 一〇 三 八王子市東中野七四二―一中 央大学文学部国文学研究室②一月二四〜二五日③岩手大学

日本口承文芸学会 ①千一六〇 新宿区西新宿八―四―五 財団法人ラポ国際交流センター 広報部気付②九月一九日③ラボセンタービル八階教室

日本文学協会 ①千一七〇 豊島区南大塚二―一七―一〇②一月三十一日③広島大学教育学部

日本文学風土学会 ①千二一四 川崎市多摩区東三田二―一―一 専修大学文学部国文学研究室内②一月二八日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会 ①千九八〇 仙台市川内東北大学文学部内②一月七日③東北大学文学部

俳文学会 ①千六〇 五京都市東山区東山七条京都女子大学文学部
 浜千代研究室内②十月三十一日③宮崎大学(農学部教室・附属図書館)

表現学会 ①千四八〇 一 一 愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内

仏教文学会 ①千一〇二 千代田区三番町六番地二松学舎大学(東部)千六〇〇 京都市下京区七条 大宮龍谷大学(西部)②八月二六〜二七日③高野山大学

万葉学会 ①千五六五 吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内
 ②一月三十一日③宮城学院女子大学

美夫君志会 ①千四六六 名古屋市中京区八事本町一〇一 中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会 ①千一五六 世田谷区桜上水三―二五―四 日本大学文学部国文学研究室内②一月三十一日③龍谷大学

館報入手ご希望の方は
 郵便番号 あて先、氏名を
 明記のうえ、郵送料(切手)を
 同封して当館情報室あてお申
 し込み下さい。

国文学研究資料館報 第二十九号
 昭和六十二年九月発行
 編集・発行者
 国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一―一六―一〇
 郵便番号 一四二二
 電話(七八五)七三二一(代)
 印刷所 株式会社 三興